

# 教職大学院における特別活動に視点を当てた講義の報告 — 選択科目「特別活動の理論と実践」の実践 —

下古立 浩 [鹿児島大学教育学系 (教職大学院)]

Report on lectures with a focus on special activities in teacher education university graduate schools:

Practice in the elective course "Theory and Practice of Special Activities"

SHIMOFURUTACHI Hiroshi

キーワード：特別活動、教職大学院、実務家教員、現職教員学生、選択科目

## 1. はじめに

本学の大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻（以下、教職大学院）は、平成 29 年度に開設された。本稿で報告する科目「特別活動の理論と実践」は、この開設年度の平成 29 年度の実践であり、本教職大学院における初めての実践である。本教職大学院の科目は共通科目 5 領域 10 科目、実習科目 6 科目、選択科目 17 科目から構成され、本科目は、選択科目の指導法深化分野の科目として位置付けられている。

本教職大学院は、研究家教員 8 人と実務家教員 7 人（みなし専任除く）から構成され、実務家教員のうち、筆者を含めた 3 人が鹿児島県との人事交流により本学に着任している。本科目は、この人事交流の 3 人の実務家教員のみで担当しており、研究家教員を含まないことは、特徴と考えられることの一つである。

また、本教職大学院の募集人員は 16 人であり、その内訳は現職教員学生 10 人、学部新卒学生 6 人を想定している。平成 29 年度入学者は、現職教員学生 10 人、学部新卒学生 2 人の 12 人であった。このうち、本科目の受講生は、現職教員学生 4 人、学部新卒学生は 0 人であった。このように平成 29 年度の本科目の開設に当たって、受講生が学部新卒学生を含まず、現職教員学生のみであったことは、もう一つの特徴と言える。

本稿では、上記のような特徴を踏まえながら、本教職大学院 1 年目の本科目の取組について、受講生が学びを深めるために講じた手立て（工夫）に触れながら報告したい。

## 2. 平成 29 年度（2017 年度）の本科目の実践の概要

### 2.1. 講義の概要

本科目の目的と内容は、シラバスに次のとおり示されている。

「本演習の目的は、特別活動の意義や特色を理解することにある〈共通〉。現職教員学生と学部新卒学生とが協働（ペアやグループを編成）し、本学の学部生（複数名）にインタビュー調査やアンケート

ト調査を実施する。特別活動の体験や、そこでの学びに関するデータを収集・分析する〈学部新卒学生〉。各チームの結果を統合して、特別活動の特徴を、学校種や、行事等の学習指導要領の内容を観点として、整理・分析する〈現職教員学生〉。特に、体験記と学習指導要領の内容との対応関係を分析しながら、特別活動の要点(重要な点や工夫が必要な点等)を明らかにしていく。」

教職大学院には、学部新卒学生と現職教員学生が在籍しており、その知識、経験等は大きく異なる。このことから、本科目の目的は、「特別活動の意義や特色を理解する」という現職教員学生と学部新卒学生共通のものに、学部新卒学生には、実施した調査のデータを収集・分析するという目的、現職教員学生には、調査結果をもとに特別活動の特徴を整理・分析するという目的が加わり、それぞれの知識、経験等に応じたものとなっている。

また、続いてシラバスには、内容面について次のように記載されている。

「また、特別活動に対してネガティブな体験や集団活動の体験が乏しいと回答した学生のインタビューに注目し、それをポジティブに変えていくために、どのような集団活動をデザインするべきかについて、検討する〈協働〉。その際、特別活動の諸論文や図書、実践事例等を読解するなどしながら、理論と実践の往還を図る。これらの過程において、学部新卒学生は集団活動をデザインする力量形成を高め、現職教員学生は、特別活動の意義や特色を、多角的に分析する力を高める。」

この内容面の記述から、本科目では特別活動の経験を調査し、その調査結果からネガティブな体験や集団活動が乏しいという経験に着目させ、より望ましい集団活動をデザインしていくことが内容的な特徴であることが見て取れる。

## 2.2. 講義の到達目標

本科目の到達目標は、シラバスにおいて学部新卒学生及び現職教員学生それぞれ以下のとおり示されている。

「〈学部新卒学生〉・特別活動の意義や特色を理解できる。・集団活動をデザインする力量を形成する。〈現職教員学生〉・特別活動の事例や特別活動の意義や特色を、多角的に分析できる。」

到達目標については、学部新卒学生と現職教員学生の知識、経験等を踏まえた目標をそれぞれ設定し、それぞれが実態に応じた学修が進められるようになっている。

平成29年度の本科目については、受講生が現職教員学生のみという構成であったことから、実際の講義にあたっては、現職教員学生を対象にした目的や内容、到達目標で進めていくこととなった。

## 2.3. 講義の授業計画

本科目の授業計画は、講義を計画するにあたって、シラバスをもとに多少の変更を加え、表1に示すとおり計画した。変更点の顕著なものとしては、第3回、第4回に「特別活動について研究者の知見に学ぶ1（講義形式による理論学修）」「特別活動について研究者の知見に学ぶ2（理論学修をもとにした演習等）」を挿入した点である。

先に触れたようにこの講義は、実務家教員3人で担当する講義である。講義名に「特別活動の理論と実践」とあるように、本科目のねらいの一つは「特別活動の意義や特色を理解できる」ことであり、理論部分を確認することは本科目の重要な要素であると考えられる。実務家教員による講義にお

表1 本科目の授業計画（シラバスと平成29年度実施時の比較）

	シラバスの授業計画	平成29年度実施時の授業計画
第1回	○ オリエンテーション（特別活動の思い出や、これまで実践したこと等の共有）	○ オリエンテーション（特別活動の思い出や、これまで実践したこと等の共有）
第2回	○ 特別活動の歴史展開の整理	○ 特別活動の特徴分析（特別活動の特徴と教科等との比較分析）
第3回	○ 特別活動の特徴分析（教科等との比較分析）	○ <u>特別活動について研究者の知見に学ぶ1（講義形式による理論学修）</u>
第4回	○ 調査のデザイン1（質問項目の検討）	○ <u>特別活動について研究者の知見に学ぶ2（理論学修をもとにした演習等）</u>
第5回	○ 調査のデザイン2（予備調査の実施）	○ 調査のデザイン1（質問項目の検討）
第6回	○ 調査の実施（本学内でインタビューやアンケートを実施）	○ 調査のデザイン2（予備調査の実施）
第7回	○ データの整理1（インタビューやアンケートのデータ確認）	○ 調査の実施1（本学内でアンケート等の実施）
第8回	○ データの整理2（観点に基づいたデータの整理）	○ 調査の実施2（本学内でアンケート等の実施）
第9回	○ 分析（特別活動の意義や特色の整理・分析）	○ データの整理（観点に基づいたデータの整理）
第10回	○ 統合（各チームの結果を集約及び特別活動の要点の明確化）	○ 分析・統合（特別活動の意義や特色の整理・分析・集約等）
第11回	○ 集団活動のデザイン1（ネガティブな体験に関するデータの共有とその背景の分析）	○ 集団活動のデザイン1（ネガティブな体験に関するデータの共有とその背景の分析）
第12回	○ 集団活動のデザイン2（事例や理論的な図書、論文等を読解、集団活動の在り方の検討）	○ 集団活動のデザイン2（事例や理論的な図書、論文等を読解、集団活動の在り方の検討）
第13回	○ 望ましい集団活動のデザインに関するアイデア集の作成1（アイデア集の構成及び作成）	○ 望ましい集団活動のデザインに関するアイデア集の作成1（アイデア集の構成及び作成）
第14回	○ 望ましい集団活動のデザインに関するアイデア集の作成2（ポスターやプレゼンの作成）	○ 望ましい集団活動のデザインに関するアイデア集の作成2（プレゼンの作成）
第15回	○ アイディア集の相互評価・総括	○ アイディア集の相互評価・総括

※下線は筆者による

いても、特別活動の教科等の違いや特徴、学習指導要領の中の位置付け等の特別活動の基本に関わることに触れることは計画していたが、大学の研究者による知見を学ぶことは、受講生が更に学びを深めるために欠かせないことだと考えた。そこで、この第3回、第4回（表中、下線部）では、研究家教員をゲストティーチャー（以下、GT）に招き、講義、演習を実施することを計画した。

### 3. 講義における受講生が学びを深めるための工夫等

受講生が学びを深めるために、授業計画において研究家教員と連携するという工夫について触れたが、今回の講義にあたっては、更に以下のとおりいくつかの工夫を試みた。

#### 3.1. 教員連携のための工夫（毎時の授業計画）

本科目の担当教員の数は3人（実務家教員）である。このような複数教員で講義を担当する場合は、確実な協働体制のもと進めていくことが必要であり、特に講義の進め方等についての共通理解は欠かせないことだと考える。そこで、3人の担当教員が共通理解のもと講義を展開できるように次のような手立てを講じた。

全体の授業計画については、講義開始前に全体構想を検討する打合せを実施した。例えば、シラバスからの大きな変更点である研究家教員をGTに招き、受講生が知見を得る時間を挿入することについては、この打合せにおいて共通理解することができた。

また、各回の講義の進め方等については、毎回打合せを実施するために各担当教員の日程を調整することが難しいことなどから、毎週講義の1、2日前にその週の授業計画の案をメールで送付し、共通理解できるようにした。授業計画案を作成する際には、各担当教員がその時間の中での役割、例えば、どの場面でコメントを行うか、どのグループの指導にあたるかなど具体的な指導場面が明確になるように特に留意した。また、この授業計画は、受講生用に加工を加え講義時に配布し、受講生が学修内容等の見通しが持てるようにも活用した。

#### 3.2. 特別活動の理論を学修させるための工夫（「1頁読書」）

実務家教員3人体制で、受講生に特別活動の理論について深く学ばせるために、研究家教員をGTとして招聘したことについては先に触れた。更にもう一つ、特別活動の理論等について受講生が学ぶ手立てとして、「1頁読書」を実施した。「1頁読書」とは、講義外で特別活動の文献5冊を4人の受講生が各回1、2冊ずつ担当して読み、受講生は紹介したいページを1頁のみ写しをとり、次時で配付し紹介するという本科目で新たに試みた取組である。この取組の特徴は、受講生の意識や学習状況等により、文献を精読し、紹介したい部分を選ぶのか、概観して選ぶのかなど選択でき、負担なく取り組めるところにある。第9、10回時の受講生の感想には、「一頁読書が充実してきた。全体をざっと見てから特に引っかけた部分を紹介しているので、ただ読むよりも本の内容が入ってきているように思う。また、どうしてその頁を選んだのか伝えるために、今までの実践や他の教材との関連性なども考えるようになってきた。」とあった。結果としては、受講生は筆者の予想以上に文献を読みこなし、取り組んでいた。この取組により受講生は、特別活動に関する基礎的な内容を確認するとともに、様々な知見を学ぶことができたと思う。

#### 3.3. 特別活動についての自己の意識を明確化させるための工夫（「特別活動とは…シート」）

「特別活動とは…シート」は、受講生が各時間の講義を振り返り、特別活動についての自身の考えをまとめるために、本科目のために作成し、使用したシートであり、毎時間、講義の終了後に記入させた（図1）。書く内容は、各時間の講義後の自身の特別活動に対する思いである。それにより、教員が受講生の学修状況を把握するとともに、受講生が自身の特別活動についての意識を明確

化させることをねらいとしている。図1の様式に毎時間、記入していくことで、自身の特別活動についての意識の変容を振り返ることができるようにした。

また、このシートの左上部と右下部には、「特別活動とは何か」という自分なりの特別活動についての定義を書かせる欄を位置付けた。これにより、講義前と講義後の自身の特別活動についての定義が、講義での学びを通して最終的にいかに変容するのか教員も受講生自身も確認できるようにした。

#### 4. 平成29年度（2017年度）の本科目の実際

本科目は、全15回の講義であるが、大きく3つのステップにからなっている。第1回～第4回は、オリエンテーション、理論学修（ステップ1）。第5回～第10回は、調査のデザイン、実施、分析等（ステップ2）。第11回～第15回は、望ましい集団活動のデザイン作成、プレゼン等（ステップ3）と3つのステップである。このステップ毎に平成29年度（2017年度）の本科目の取組の実際の一部を以下に述べたい。

なお、本教職大学院の講義は4ターム制で実施されており、本科目は第4タームにおいて第1回～第14回までは、1日に2コマずつ7日で実施、第15回のみ1日に1コマ実施したものである。

##### 4.1. ステップ1（オリエンテーション、理論学修）

第1、2回のオリエンテーションにおいて、講義の目的、計画等を知らせるいわゆるオリエンテーションを行った。また、図1の「特別活動とは…シート」に現時点での自身の特別活動についての定義の記入、特別活動の思い出や実践内容などこれまでの特別活動への取組を振り返る活動、学習指導要領を確認する活動などを行った。

特別活動とは…シート		氏名【                      】
【特別活動とは…の】【特別活動】とは何か、考えてみよう。 (書き出し:「特別活動とは」)		
12 月 6 日		
【特別活動】に思うこと① 特別活動について、思うことを書いてみよう。		
12 月 6 日		
【特別活動】に思うこと② ↓		
12 月 14 日		
【特別活動】に思うこと③ ↓		
12 月 20 日		
【特別活動】に思うこと④ ↓		
1 月 10 日		
【特別活動とは…の】【特別活動】とは何か、考えてみよう。 (書き出し:「特別活動とは」)		
2 月 6 日		

図1 「特別活動とは…シート」

本科目では2コマ続きの講義の最後に、図1の「『特別活動』に思うこと」の欄に、その日の学修を終えての特別活動に対する思いを本時の学修のまとめとして記述させた。次が、第1, 2回の受講生のまとめの一部である。

「本日の学習では、今までの特別活動の振り返りや、よさと課題の確認、他の教科との差異や共通点などを行った。学習指導要領にしっかりと目標や内容が書かれているにもかかわらず、経験や勘だけでなんとなく行っていた。この活動でどんな資質・能力を身に付けたいのかを明確にして指導に当たりたい。」「学習指導要領解説特別活動編には、『各教科等と特別活動は、互いに支え合い、補い合う関係にある』と示されているが、この点の考えが特に大きく欠落していたようだ。」

「学習指導要領を読むと、特別活動の意義やねらいが明記されており、それをふまえて指導に当たっていなかった自分を恥ずかしく思うことだった。(以下略 執筆者)」

今回の講義を受講した受講生は、全員が現職教員学生であった。今回の受講生はこれまでの教職経験、実績などが豊富であり、学校や研究組織などのミドルリーダーとして活躍できる人材である。ただし、今回の受講生のうちに特別活動を研究領域としている者はいない。記述された内容を見ると、今回の受講生のような、経験、実績豊富な教員でさえ、特別活動に対しての認識が十分でない状況であることが見て取れる。しかし、一方受講生はこの日の講義を経て、的確に自己の現状を理解するとともに、これからの学修の方向性を見いだしていたようであった。

#### 4.2. ステップ2 (調査のデザイン, 実施, 分析等)

第5, 6回では、特別活動の体験や学びに関するデータを収集・分析するために本学の学部生に実施するアンケート調査の検討、作成を行った。

4人を2グループ(2人ずつ)に分け、それぞれの担当教員と相談するなどして検討を進めた。検討した内容は、調査項目に加え、聞き取る方式か記述させる方式にするか、また、アンケートの場合はどのくらい記述式を入れるかなどであった。2グループそれぞれ検討したが、最終的には、両グループとも統一した選択式のアンケート用紙を作成し、理由等についてはその場で聞き取る形で、実施することになった。表2がアンケートの質問項目等である。

調査は、44人の学部生に対して行われた。調査結果は「いい思い出」として多かったのは、クラブ活動、お楽しみ会、遠足、修学旅行、集団宿泊学習、卒業式、芸術鑑賞会、運動会、学習発表会などであった。また、「よくない思い出」として多かったのは、健康診断、話し合い活動、代表委員会、交通安全教室、大掃除、避難訓練、係活動、委員会活動、児童会集会活動などであった。

アンケートを実施しての受講生の感想の一部が次である。

「アンケートの分析から、ネガティブなイメージが表出されるのは、『教師の関わり』『子ども同士の関係性』『子どもと教師の関係性』から生じるものではないかと予想される。これから作成するデザインの切り口としては、『全員参加を目指す』『合意形成の在り方』を軸に考えている。アイデア集に貢献できるよう努めたい。」「アンケート調査を行い、学生の小学校時代の思い出等を聞き取った。その中で、自主的な活動が印象に残っていること、友達と協力した経験が残っていること、出会った担任によって印象が異なっていることなどが共通していた。このキーワードを

表2 特別活動の体験や学びに関するアンケートの質問項目等

質問1	1 下の①～⑦は、小学校での特別活動（学級活動・児童会活動・クラブ活動）の内容です。いい思い出には○、よくない思い出には×、どちらともいえない場合は空欄で回答してください。
項目1	「学級活動」：①話し合い活動（ ） ②係活動（ ） ③お楽しみ会（ ） 「児童会活動」：④代表委員会（ ） ⑤委員会活動（ ） ⑥児童会集会活動（ ） 「クラブ活動」：⑦クラブ活動（ ）
質問2	2 下の⑧～⑳は、小学校での特別活動（学校行事）の内容です。いい思い出には○、よくない思い出には×、どちらともいえない場合は空欄で回答してください。
項目2	「学校行事」：⑧入学式（ ） ⑨卒業式（ ） ⑩大掃除（ ） ⑪健康診断（ ） ⑫学習発表会（ ） ⑬芸術鑑賞会（ ） ⑭運動会（ ） ⑮避難訓練（ ） ⑯交通安全教室（ ） ⑰防犯教室（ ） ⑱遠足（ ） ⑲修学旅行（ ） ⑳集団宿泊学習（ ）

もとに望ましい集団活動デザイン集を作っていきたい。」

調査を実施，分析し，受講生は特別活動に対するネガティブなイメージが，活動そのものに起因しているのではなく，その他の要因にあるのではないかという気付きが見られた。

#### 4.3. ステップ3（望ましい集団活動のデザイン作成，プレゼン等）

第11回～第14回では，アンケート結果の分析から，4人それぞれ「望ましい集団活動」をデザインし，作成を進めた。作成にあたって，「1 タイトル」「2 調査の結果」「3 結果から見えてきた問題点等」「4 問題点を克服する工夫のポイント」「5 望ましい集団活動のアイデア」の構成にするように指示した。

実際に受講生が作成したタイトルと工夫のポイントをまとめたのが表3である。

最終回の第15回においては，作成したアイデアを発表し，相互評価を行った。進め方は，①準備（入れ替わり含む）4分，②発表8分，③相互評価3分（一人1分程度）である。次がこの時間のある受講生の感想である。

「『望ましい集団活動デザインのアイデア』を発表し合った。他の院生の発表を聞く際には，特別活動の目標を何度か読み返しなが，『そのアイデアで心身の調和のとれた発達と個性の伸長が図れるか』とか，『集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度が育つか』とか，『自己の生き方についての考えを深め，自己を生かす能力が養われるか』などといった問いをもつことができていた。このような問いをもてるようになった点に，この講義を通じた自身の成長を感じる。あわせて，この問いは，今後自分が原籍校で特別活動の時間をデザインする際に，自分自身に向けて発せられるべき問いなのだとも思っている。」

## 5. 「特別活動とは…シート」の記述内容から見えてくること

### 5.1. 「『特別活動』に思うこと」の記述内容について

受講生が各時間の講義を振り返り，特別活動についての自身の考えをまとめた「『特別活動』に思うこと」の記述内容について整理し，その特徴や傾向を確認する。

表3 受講生の「望ましい集団活動」デザインのタイトルと工夫のポイント

	タイトル	工夫のポイント
A	代表としてのやりがいを感じさせる代表委員会のあり方～RV-PDCA サイクルを児童に委ねることを通して～	代表委員会に関わる児童がやりがいを感じられるように、RV-PDCA サイクルを児童の手に委ねる。
B	より良い合意形成を目指す話し合い活動	1 児童が見いだした課題に応じたテーマ設定 2 「生産的思考」のプロセスをふまえた話し合い活動 3 「司会ハンドブック」の作成及び教師との打ち合わせ 4 「話し合いのルール」づくり
C	クラスのためになった！を実感できるPDCA係活動	PDCA サイクルで係活動を自主的に行い、自分の活動がクラスみんなのためになっていることを実感できるように、活動報告掲示板、感謝を伝える時間を作る。
D	自主的・実践的な態度を育てるみんなで作り上げる楽しい集会活動	1 ねらいの明確化 2 活動の見通し 3 全員での役割分担 4 多様な集会活動との組み合わせ

※A～Dの表記は、各受講生を表している。

整理に当たっては、KH Coder (注) を用いた。

受講生全員分(4人)の「『特別活動』に思うこと」の記述欄の語の出現回数を各講義日毎(8日)に整理したのが、表4である(出現回数3回以上を抜粋)。また、全講義日、全受講生の記述の全てを共起ネットワークにしたものが、図2である(複合語を処理、4語以上で作成)。

表4を見ると、各講義日の抽出語は、各回の講義の内容に依存していることが分かる。例えば、「学習指導要領」という抽出語は、第1, 2回の講義において、特別活動と教科等の学習指導要領の比較をする活動を行ったため出現回数が多くなったと思われる。この「学習指導要領」という抽出語に着目すると、学習指導要領は特別活動を考えていく上で欠かせないものであるにも関わらず、その後の出現回数が低い。このことは、受講生は学習指導要領を基本としながらも更に深い学びに取り組んでいったことの一つの表れではないかと推察する。図2を見ると、今回の講義のテーマである「特別活動」が軸となり、様々な関連がネットワーク化され表れている。ステップ1の理論等を学ぶ時間で、受講生は学習指導要領の確認を行った。これにより左部に学習指導要領の内容につ

表4 各講義日の「『特別活動』に思うこと」

第1, 2回		第3, 4回		第5, 6回		第7, 8回		第9, 10回		第11, 12回		第13, 14回		第15回	
抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数	抽出語	回数
特別活動	7	先生	6	学級	4	集団	7	学部	4	活動	9	活動	8	活動	8
学習指導要領	5	目指す	4	集団	4	活動	6	活動	4	生徒	7	イベント	7	実践	4
教科	4	コミュニティ	3	力学	4	アンケート	4	考える	4	先生	5	学級	5	集団	4
		学ぶ	3	質問	3	学級	3	学校	3	行う	4	子供	5	発表	4
		教師	3			感じる	3	楽しい	3	デザイン	3	時数	5	問い	4
		講義	3			調査	3	教育	3	学校	3	クラス	4	デザイン	3
		集団	3					時間	3	考える	3	係	4	頂く	3
		組織	3					話し合い	3	分析	3	思う	4	特別活動	3
		特別活動	3									特別活動	4		
												経営	3		
												自主	3		



わりを持って進められたことが改めて確認できた。

## 5.2. 「特別活動とは…」の記述内容について

シートの「特別活動とは何か」を書かせる欄に、実際に記入された内容が表5である。

これを見ると講義前の記入内容は、特別活動の構成内容など形、いわば外観としてどのようなものであるか捉えた定義が多い。一方、講義後の記入内容は、特別活動の外観ではなく、その性質について触れている定義が多い。講義を通して、受講生は、特別活動の本質は何かを見極めようと学修を進めてきたのではないかと考える。

## 6. おわりに

教職大学院開設1年目、最初の本科目の実践において、受講生が学びを深めるためにいくつかの手立てを講じた。これらの手立てについては、受講生に活動の時間配分の見通しまで持たせるための授業計画案の改善、講義時間内でのシートの記入時間の確保など、次年度に向けていくつかの課題もある。しかし、結果として表5に見られるように受講後に受講生の概念に変化が見られたことは、まずは、シラバスにあるこの講義の大きな授業方針、設計によるところが大きい要因と考えるが、加えて、今回実際に講義を行う際に講じた手立て（工夫）がその一助になった可能性もあるのではないかと考えている。

教職大学院において、本科目は、特に現職教員学生にとって特別活動を深く考え直す機会という位置付けだと考える。今回、実践の中で、現職教員学生の講義前の特別活動に対する認識が予想以上に十分ではないことが分かった。しかし、本科目を通して、その認識が深まっていく姿を目の当たりにすることができたように思う。今回の実践を次年度の講義に生かしていきたい。

**注** KH コーダーは、樋口耕一（『社会調査のための計量テキスト分析内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版、2015年）に基づく。<http://khc.sourceforge.net/>よりダウンロード（2017年8月29日取得）。

## 参考文献

- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版社。
- 片岡徳雄編（1990）『特別活動論』福村出版。
- 相原次男他（2010）『新しい時代の特別活動』ミネルヴァ書房。
- 林尚示編著（2016）『特別活動—理論と方法—』学文社。
- 原田恵理子他（2016）『最新特別活動論』大学教育出版。
- 山崎英則，南本長穂編著（2017）『新しい特別活動の指導原理』ミネルヴァ書房。